東洋英和女学院
史料室だより No.107
2026.11.6 発行
東洋英和女学院
史料室委員会



NHKスペシャル「少女たちの戦争 時を超える学級日誌」で紹介された東洋永和女学校の戦時下の史料群

戦後81年を迎えた2026年8月15日の終戦記念日に、本校を取材したNHKスペシャル「少女たちの戦争 時を超える学級日誌」が放送されました。「次世代への戦争の記憶の継承」をテーマに、当史料室所蔵の戦時下の史料群の活用が紹介されました。今号の特集では番組にもご出演いただいた、当時在校の先輩がたへのインタビューを掲載します。

目 次

特　集　　昭和18年　東洋永和女学校入学の同窓生に聞く 戦時下の日々
—NHKスペシャル放送にちなんで— …… 2
展示コーナーご案内 …… 14
史料室から、ごきげんよう　短大木造校舎で過ごした小学生
—小学生と学生が同居!?— …… 14
利用統計／史料室の活動より（2026年４月～2026年９月） …… 15

特　集　昭和18年 東洋永和女学校入学の同窓生に聞く 戦時下の日々
―NHKスペシャル放送にちなんで―

戦後81年を迎えた2026年８月15日の終戦記念日に、本校を取材したNHKスペシャル「少女たちの戦争時を超える学級日誌」が放送されました。今号の特集では、番組にもご出演いただいた昭和18年東洋永和女学校入学の同級生３名へのインタビューを掲載します。

※インタビューは広報史料室スタッフが行い、NHKスタッフも随行しました。相互で質問を設定し、撮影や録音を同時に行っています。特集用に言葉を一部補完・修正し、時系列の並べ替えなどの編集をしております ますことをご了承ください。

井上 二葉さん

ピアニスト。オーストラリア シドニー生まれ、外交官の父を持ち欧州で育つ。昭和15年にハンガリーから帰国。小学校は国民学校に通い、昭和18年、東洋永和女学校に入学。東洋永和での勤労動員を経て、昭和20年４月に山梨県へ疎開。戦後、東洋永和に戻り、昭和21年３月に退学したのち、東京音楽学校（現 東京藝術大学）に入学。（取材：2026年５月20日）



まだ平和だった女学校１年生の頃

井上二葉さん（以下「井」）： １年生の時は学校の工場もなく、普通に学校生活を送っていました。

問： クラス日誌を読むと１年生はよく騒いで、怒られている記述がたくさんあって、しょっちゅう担任の比屋根さかえ先生の赤い字で、「騒ぎすぎです」って怒られている記述があるのです。そんな感じでいらっしゃった？

井： まあ、幼いんですよね。

問： とにかく集まると、大騒ぎ、おしゃべりが止まらないみたいなお話がたくさん書かれています。

学校でのピアノ演奏、ピアノ科のことなど

問： 昭和18年の10月９日の日誌に、音楽の時間は「井上さんにピアノをひいていただいた」という記載があります。何をお弾きになったのですか？

井： この時かどうか覚えていませんけど、先生がショパンのお話をなさって、「幻想即興曲」を弾いた覚えがございます。

問： 昭和18年に入学された時は、ピアノ科〔※課外でピアノを習う制度〕はありましたか？

井： ありましたが、私はピアノ科には入っておりませんでした。でも校内にピアノの練習室が割にありました。練習室は、ピアノ科の生徒しか入っちゃいけなかったんですが、お友達がピアノ科の方で、一緒に入り込んだり。東京音楽学校〔現 東京藝術大学〕に入ったら建物の条件は英和の方がはるかに良かった。本当に恵まれた学校でしたね。

高等女学校となり「礼拝」が「朝礼」に

問： 昭和19年のクラス日誌をご覧いただくと、４月の初めから礼拝がなくなっていきます〔※文部省が認可するところの高等女学校になったため、学校内での宗教教育・宗教行事が中止される〕。１年生の時には毎朝あった礼拝が、２年生の４月からなくなってしまうことを、どのように感じましたか？

井： 〔毎朝礼拝を行っていたマーガレット・クレイグ記念講堂ではなく〕屋上で並んで、教育勅語などを聞かされたのでしたかしら。

問： はい。あと、宮城遥拝〔※皇居（宮城）の方角に向かって敬礼や祈りをささげる行為〕もそうですね。「礼拝」ではなく、「朝礼」だったわけですね。

井： 世の中全体で戦争色が強くなって。ですから、礼拝がなくなって寂しいとか、懐かしかったとかじゃなくて、周りがもう本当に戦争に入っていくという感じで。それこそ最後の一人になるまで、女も

子どもも戦争しなきゃいけないんだというような空気でしたからね。一つ一つの事柄に懐かしみだの寂しさなんか、あまり感じなかったような気がしますね。もう周りに振り回されてしまっているという。

問：教育勅語を読んでいる時はどのようなお気持ちでしたか？

井：それは小学校の頃から続いております。普通の国民学校に行っておりましたから。普通の成り行きでしたね。もう日常から変わってきましたから、学校の中だけの変化じゃなかったのですね。

問：文部省が定めるところの高等女学校になった変化をどのように感じましたか？

井：何か格が上がったという感じはいたしました。

問：やっと国の認める女学校になれたというような考え方もあったわけですね。

海外で知った、個人個人を引き裂く戦争の悲劇

問：井上さんの場合は、海外で生まれ、かなり自由主義的な雰囲気の中でお育ちになったと思うのですけれども、そういう経験から見て、日本は息苦しいなとか感じましたか？

井：海外で外国の学校に入った時には、やはり日本人ということをとても意識させられました。学校中で一人だけでしたから。そうすると、親にも日本人として恥ずかしくないようにとかいろいろ言われますから、「国」をとっても意識するようになったのですよね、小さいながらに。

ヨーロッパにも戦争の色は濃くなってきて、帰国するにはもう船がなくてシベリア鉄道で帰ってくるような時代になりましたから、日本へ帰ってきて、ある意味まだ平和だったんです。初めはね。それで戦争色が濃くなった時に、何か自然な感じだったのですよ。ヨーロッパで経験しておりますので、自然な感じ。日本もこうなった…という。

問：ヨーロッパで戦争の雰囲気を味わっていたから、知らない感じではないということですね。それが身近になってきた。

井：ハンガリーにいた時のピアノの大先生の助手がカナダ人で、そのカナダ人の先生がハンガリー人の作曲家と婚約してすごく幸せそうだったのが、戦争のためにカナダへ送り返されるので別れさせられて。その時にうちへ見えて非常に嘆いてお泣きになった。こっちは子どもですから、慰めようもなく、母親が「本当にかわいそうだ」って話していましたけれども。そういう経験をしておりますので、戦争って人間同士の間の悲劇だというのを直に感じたんですね。戦場じゃなくても。それで日本に帰ってきてからも、父がドイツ大使館の疎開先の仕事をしておりまして、庭続きのドイツのお子さんたちと遊んでいた。それが、ドイツが先に降伏したら、もう口も利いちゃいけないって言われて。個人同士の関係で、いろいろと経験を積んでいたものですから、周りが全部戦争色になった時に、何か自然に、そんなふうになってしまったという感じでした。

女学校２年生の12月から学校工場で働く

問：いよいよ昭和19年になると、勤労動員で上級生は7月から常に働くようになって、そして井上さんの2年生も12月から働くようになります。日誌を見ていると、上級生と組んで、学校の中の工場で働くという状況にもなっていきますね。どのような作業をされていたのか、教えていただけますか？

井：沖電気が学校へ入ってきて、お教室を作業場にしました。私ども２年の時に５年生と一緒のお部屋で。無線機を、組み立てしておりました。上級生はハンダ付けや組み立ての方で、〔下級生の〕私どもはそのための線を仕分けたり、分類した物を回すような下準備をしておりました。

問：場所は家庭科室とか音楽室とかだったようです。井上さんは、本来、教室だった所が工場になってしまったということについては、当時はどういう思いを持たれていましたか？

井：まあ、仕方がなかったんですね。姉たちは学外の工場へ行っておりましたから、学校へ行けるというだけでも。お友達に会えますしね。

問：作業をしている時の気持ちというのは、どのようなものでしたか？

井：もう一生懸命やっておりましたね。別に辛いとかそういうのじゃなくて。

問：みなさんがされていた作業というのは、戦争のための機械を作る作業だったと思うのですけれども、そういうことを考えながら作ったりとかはあったのでしょうか？

井：戦争に使うとは言われておりました。ただね、私、疎開先でね、本当の工場の生活をしているのですよ。なので、永和の時のはずいぶん楽だったなという印象が強いです。第一、お友達と一緒ですしね。学校ですし。

疎開先での過酷な勤労動員

〔昭和20年４月、自宅のある大森の馬込周辺で大きな空襲があり疎開することに〕

井：山梨へ疎開に。姉たちは、勤労動員のため東京へ戻りましたけど。私は富士吉田の町の学校へ参りました。東京のいい学校から来たって言われて、すごく大事にはされたのですけど、すぐに学校から工場へ行かされまして、学校で授業を受けたのが２日ぐらいあったかなかったぐらいで、すぐ行きました。その時に富士山の麓の林を切り開いて、中島飛行機という東京の大きな航空会社の姉妹工場がそこにできていて、動員されておりました。私、とっても痩せて小さかったもので、ひ弱に見えたらしくて、事務へ来ないかって言われたのですが、特別扱いされちゃいけないと思ったので、現場においてくださいと申し出ました。それで、飛行機を組み立てるところの現場で働きました。飛行機の後ろの尾翼の垂直尾翼という工程にいまして。骨組みができてきて、それにジュラルミンのカバーをかけて、電気ハンマーでその穴にダーッと鋲を打つ。電気ハンマーというのは、エアハンマーなんですよね。管があって、空気の圧力でそれを動かしてガンって打つ仕組みなのですが、ものすごい音だった。

問：ピアニストになろうという夢が小さい頃からおありでしたら、手も指も大事でいらっしゃるでしょう？それに〔工場内では耳が潰れてしまうほどの騒音が鳴り響いていたので〕耳だってやられてしまうことを、考えませんでしたか？

井：考えていたら、事務に行ったかもしれませんね。やっぱりみんなが戦争のため働いているのに、自分だけが楽をしてはいけないと思っていました。

東京に戻る

問：終戦を疎開先で迎えて、永和にお戻りになったのはいつ頃でしたか？

井：父に、アメリカ兵が入ってきて、東京はどのような様子かわからないから戻るなって言われて。そのうち学校から、東京は大丈夫だから帰っていらっしゃいって言われて。12月に私だけ一人で帰りました。家は焼けなかったのですけど、焼け出された親類が入っていまして、ごっちゃごちゃの生活でした。

問：山梨で過ごされて、戻ってくるともう学校の一帯は焼け野原で。どのような印象を持たれました？

井：とにかくほっとしましたね。お友達の中へ帰れたということで。ただ食べ物がございませんでね。親類の買い出しについて行ったり。脚気（かっけ）になりまして、本当にへろへろしておりました。友達はいて嬉しいけれども、やはり食料事情も住宅事情も非常に大変な中で。それで学校に戻っても、もう〔駐在していた〕軍隊はいなくなっていましたが、学校の校舎はずいぶん荒れておりましたね。

親世代との相違　少国民としての少女たち

問：みなさん、それぞれのお立場で、それぞれの年齢に応じて、辛い思いをされていらっしゃると思うのですね。井上さんと同級生の方たちは、良かれと思って、工場で働いて、飛行機を作り、そして召集令状を書いて…ということは、要は銃後の人たちもある種、戦争を「頑張れ」というように、推し進めた力にもなっていると思うのですが、そのことについて、今はどのように感じられますでしょうか？

井：仕方なかったと思います。大人たちは反発する気持ちを持ったのでしょうけど、そういう年じゃありませんでしたしね。親たちはそうじゃなかったのを見ていますけれども。例えば東洋永和でも家にある貴金属を供出しなさいと言って、子どもが家から持ち出す。親たちが嫌がっても、学校でお国のためだって言われたんだからって私は持って参りました。やっぱり親たちは個人的な思いがあるものを持っていかれるのが嫌だったりね。いくらお国のためと言っても、昔のいい時代の名残は親たちには残っていたわけですから。戦争反対まではいかないにしても、気持ちの中ではね、そういうモヤモヤが親たちにはあったのですけど、私どもには逆にそれはありませんでしたから。

問：そうですよね。当時は純粋な気持ちでされていたんだと思うのですよね。

井：もう国のためという。仕方がないと思っていました。

問：井上さんは、今に至るまでの長い時代を生きてこられた。あの当時の12～15歳の少女たちが、良かれと思って一生懸命やっていることが、そういう結果になっていったことについて、戦時下の時代を今はどう思われますか？

井：苦労することがなんともなかった。我慢強かったですね。ものがなくても平気でした。仕方ないと思いました。何でもあるものを利用するということで。今でもそれが残っているのは、使える限りいろいろ、いつまでも直して使っているとかね。

ですから、ある意味、若い頃ああいう経験をしたから、戦争そのものはもちろんいけないけれども、人間がしっかりしたんじゃないかっていう気はしますね。苦労を苦労と思わない。それから甘やかされませんでした。みんなそうでしたから。食べ物がない、みんなないわけですから。

逆に、お互いの思いやりはとっても強かった。音楽学校に入った時に、寄宿生の地方からいらっしゃる数は大変多かったのです。そうしましたら、ある日、1年生で入った時期、寄宿生がみんな暗い顔して、どうしたのって言ったら、舎監から食べ物が3日分しかもうないから東京に親類のある人は行ってくれって言われたって、みんなもう本当に困ったような顔をして。ですから助け合い、お互いに思いやりはずいぶん強かったと思います。お弁当持っていかれないから遠足行かないって言うんですね。それじゃ、なんとか通学生の私たちの方がありそうだから2人分ずつ持っていこうじゃないかって。競争するというよりも、みんな助け合ったというような時代ですから、かなり今とは違うのじゃないでしょうかね。

問：なるほど。精神的な鍛えられ方が今と違うということですよね。

井：先生がたも厳しいのは当たり前で、本当にそれにみんな耐えて勉強し、戦争中にできなかった勉強ができるようになった喜びの方が大きかった。

問：勉強できなかったのは辛かったですか？

井：辛いも何も、仕方なかったのですけど、後ではやっぱりあの時代、勉強していればこんなんじゃなかったと思うことはたくさんありましたね。その時は辛いっていうのじゃないんですよ。今ちょっと想像できないかもしれないけど。もう、そういう空気の中にどっぷりいるわけですから。

問：当時は井上さんも、あの年代のみなさんも、お国のために頑張って、勉強も投げ打って一生懸命働いて、ものを作れなくなったら召集令状を書いて。そういった行動が、ある種、戦争を一緒に遂行することを担っていたことになりますが。こういう時代は良くないと、当時からお感じになっていた？

井：その当時は批判するという気持ちはありませんでしたね。今は、もちろん戦争はいけませんよ。だけど、私たちがどうすることもできないことでしたからね。上の人たちが戦争をしないために随分いろいろ工作して努力したのは知っていますけど、そうなっちゃったってことは、やっぱり軍部の力がそれだけ強かったので仕方がなかったという。それまでの日本の成り行き、その時だけじゃなくて、日露戦争に勝ったから、やっぱり思い上がりが強かったのでしょうね。英米を知っていたら、あれに勝てると思ってなかったはずじゃないかと思うけど、その時は、神風が吹けば日本は勝つのだろうって言った時代ですから。昔から一度も負けたことがない国だということはもう嫌っていうほど聞かされました。だから勝つのだっていうのは成り立たないとは思ったけれど。ソ連が参戦した時に、母親が「ああ、もうダメだわ」って言って、暗い顔をしていたので、へえそういうものかとは思いましたけど。親たちはもう少し冷静だったのかもしれませんね。

戦争によって失われたもの

問：学校生活で何が一番楽しかったですか？

井：いいお友達が、たくさんできたことじゃないでしょうかね。

問：戦争でいろいろなことがあったと思うのですけれど、生徒のみなさん、戦争によって失われたものっていうのは何でしょうね？

井：実際に戦争のためにご家族などを亡くされた方は別だと思うのですけれども、そうじゃない、まあ私もそうじゃないのですけれど。家も残りましたしね…。

失くしたもの…普通に楽しめた少女時代、青春時代、それがなかったということでしょうかね。もし、失くしたものといえば。

大変な思いが多かった時代が続きましたから。だけども、普通のお友達づき合いや何かで良かった思い出はたくさんありますからね。特に何と言うと、そのくらい。それしか言えないと思います。

次世代へのメッセージ

問：ありがとうございます。井上さんが我々の大先輩として生きてこられた上で、下の世代に井上さんが経験されたことをもとに、何か伝える、何かこうした方がいいよっていうようなメッセージがあれば教えていただきたいです。

井：冗談でも人殺しの漫画とか、そういうものがあっては困ると思いますね。それから若いうちは、やっぱり先生だの親だの、大人の言うことにもうちょっと従順であって、あんまり自分の主張ばっかりしない方が、将来のためには良いのじゃないかという気がいたします。今、若者が強いですよね、

とっても。叱る人を嫌がるでしょ。そういう社会がちょっと私には想像がつかないのです。若いうちには鍛えられてしかるべきだと思いますからね。あんまり大事にされすぎて主張ばっかり通ると、どのようなことになるのかしらと思って、将来いろいろなことに耐えられるのかどうか。いい面だけが伸びていくのはいいのですけれど、情報が多すぎますよね。

（インタビュー後、かつて学校で伴奏なさった讃美歌14番〈現 讃美歌30番〉をピアノで演奏してくださり、さらにフォーレの「舟歌」第6番 変ホ長調 Op.70を演奏してくださいました）

長崎 美代子さん（旧姓：平林）

昭和18年、東洋永和女学校に入学。東洋永和での勤労動員を経て、昭和20年4月に福井県へ疎開。2008年刊行の『表参道が燃えた日―山の手大空襲の体験記―』の編集委員として、多くの東洋英和関係者の戦時体験の証言を集めた。

（取材：2026年5月25日）



長崎さん寄贈の貴重な「学校工場作業日誌」から

問：（長崎さんの学年の「学校工場作業日誌」のコピーを提示）長崎さんは2年生の時に、勤労動員が始まりました。昭和19年の12月16日が最初の記述で、欠席者に「平林」（長崎さんの旧姓）と。

長崎美代子さん（以下「長」）：なんだか弱くって。その頃はね、栄養失調もあったのでしょうけどね。

問：東洋英和女学院の史料室に2010年に長崎さんご本人が送ってくださった資料も残っておりまして、「私は旧姓平林、学年一の軽量で虚弱児＋栄養失調で、第一日目から欠席の連続でした」って書いてあります。今、長崎さんがおっしゃった通りです。欠席が多かったのは、体が小さかったからですか？

長：体が小さいというより、本当に、栄養失調みたいなね。食べるものがない時でしたからね。そんなこと書いていましたか。

問：どのようなものを召し上がっていらっしゃいましたか？

長：そんなことを思い出すのも嫌でね。あんまりね、思い出さないようにしていたもので。

問：もう一つ別の資料（コピー）がありまして、長崎さんが疎開されて学校を離れる時に、勤労動員で一緒だった上級生が書いて贈ったカードでしょうか？

長：ああ、そうですか。本当に上級生がお姉様っていう感じでね。いろいろ面倒を見てくださってね。ずいぶん大人っぽく見えましたね。

問：読むと、当時、「ヒーチャン」って呼ばれていらしたみたいです。

長：そう、「平林」の「ヒーチャン」。「ヒーチャン」と呼ばれていましたね。

問：「組立に、ハンダ付けに、何でも優秀な方でしたね」って書かれていますね。上級生は優しくしてくださいましたか？

長：そうですね。とても優しくしてもらいました。

問：あと「数学の天才とは実に羨しいです」とも書かれています。

長：数学は、大好きだったものでね。やっぱり、女の子はどっちかっていうとね、数学ができるという人も少なかったものでね。まあ、ちょっと目立ったんだと思いますけどね。

問：この勤労動員で働いていた時というのは、数学の授業とかはできましたか？

長：授業というのは、ほとんどもうできなくなってね。もうちょっと普通の時代だったらね。

問：勤労動員で働いていた時は、学校の中の工場で働いていたのですよね。勤労動員中の作業というのは辛かったのですか？

長：勉強とは別なことだったもので。そういう点ではね、面白かったというと、ちょっと語弊がありますけどもね。沖電気の仕事をしていました。

問：長崎さんは手先が器用だとおうかがいしていたのですけど。勤労動員の時にはどのような作業でしたか？ ハンダ付けでしたか？

長：そうですね。ハンダ付けも、結構難しいんですよね。なかなかうまくできない人もね、多かったものでね。私は意外と得意でした。

問：そういう作業をされている時というのは、どの

ようなお気持ちで作業をされていましたか？

長：なんというか、この先どうなっていっちゃうのかなという不安がね、結構ありましたね。そして、１人、２人と疎開して、いなくなっちゃうんですけどね。それで、私どもは福井県の方へ疎開して。そっちではまた全然別の、田植えをしたり。初めて田植えなんかしましたけれどもね。

問：勤労動員の話に戻っていただいて、当時、学校が工場になっていたのですよね。学校が工場というのが想像がつかないのですが、学校工場ってどういうことなのでしょうか？

長：沖電気の本職の方が就いて、そして女学校の５年生、上級生がね、いろいろ面倒を見て下級生を指導してくれましたけどね。

問：当時、学校に工場があるっていうことをおかしいなと思ったりはしませんでしたか？

長：それはもう当たり前で、なんとも思わずに。今じゃ考えられませんよね。今こういう時代に生きていたんじゃなかなかね、想像がつかないかもしれないけれど、当時とすれば学校工場で働くのが当たり前みたいにね、思っていました。

問：学校工場で皆さん働いていたり、あるいは蒲田とか、大田区の工場に上級生の方が行っていたようです。長崎さんのクラスではないのですけれども、ほかの勤労動員日誌では、例えば、「どうしてこんなにできないのかと思うくらいだらしない人」とか、リーダーの方がクラスメイトの方をちゃんとやってない、あるいは、お話が多い、熱心ではない、１個もできていないとか評して。挙句の果てには人の名前じゃなくて番号で呼んだりしているんですよね。長崎さんの時にはそういうことってございましたか？

長：そういうことは全然。そういうことは聞いていなかったし、今までそんなことがあったのかなと思いますけどね。私どもなんかはね、そういう言い方しちゃ、いけないでしょうけど、いつもと違うことをするのがちょっと面白くて。

問：そういうことが別のところではあったということについてはどう思われますか？

長：まあ、何がね、起きてもおかしくないような事態でしたから。

地下で待機した時の空襲への恐怖

問：次に空襲についておうかがいさせてください。警戒警報とか空襲警報とか、作業中に出ていたかと思います。空襲警報が出た時は、どういうふうに行動されていましたか？

長：学校は地下室〔※半地下のクロークルーム＝コートや外履きを在校中に置いておく専用スペース〕があったんですね。空襲警報が出るとその地下室の方へね、みんな入って。まあ、〔被害は〕どうってことがなかったものでしたが、やっぱり不安な思いでその時はね、過ごしましたね。

問：ずいぶん怖い思いもされたんじゃないですか？

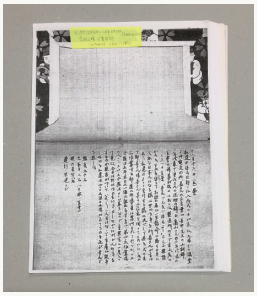
長：ええ、そうですね。まあ、空襲警報が出ると、表参道が通学路だったのですけど、表参道のところに、道のところにね、穴〔防空壕〕が掘ってあってね。あんなところじゃね、とても〔※学外で見知らぬ人たちと待避しなければいけない〕。親たちもね、覚悟をしていたんでしょう。そんなところを通学させていましたからね。

問：学校で空襲警報が来て、地下室で不安な気持ちで待たれていたっておっしゃっていましたけれども、その待っている間というのはどのようなことをされて待っているのですか？学校で避難している時に地下で讃美歌を歌っていたという証言があるのですが、記憶はございますか？

長：そうですね。英和っていうのはミッションで、讃美歌も表向きはね、そんなに大っぴらに歌えなかったんでしょうけれども、昼休みとかは歌っていました。

番組制作をつないだ史料　長崎美代子さんご寄贈「学校工場作業日誌」のコピー

史料室では2010年に長崎さんがご寄贈くださった「学校工場作業日誌（昭和19年12月16日～20年５月25日）」のコピーを保管していました。原本は失われてしまったようですが、長崎さんがコピーを残し、史料室にお届けくださったことで貴重な記録史料となりました。今回の特集にご登場いただいた３名全員のお名前がこの史料で確認できます。勤労動員中の生徒たちの心情を伝える、NHKの番組制作においてもキーとなった史料でした。



長崎美代子さんが編集に携わった『表参道が燃えた日』が重版されました。

しばらく絶版となっていた『表参道が燃えた日 ―山の手大空襲の体験記―〔増補版〕』（長崎美代子さんが編集委員の一人）がこのたび重版の運びとなりました。昭和20年3月10日の東京大空襲ののちに、首都爆撃の総仕上げとして4月13日から5月25日にかけて、東京山の手地域で大規模な空襲が繰り返されました。その際に罹災した東洋英和の関係者も多数寄稿している書籍です。



同級生が召集令状を書いていたこと

問： 長崎さんは昭和20年4月に福井県の方に疎開されていましたね。残った生徒さんたちが5月25日の山の手大空襲の後に学校工場も機能しなくなって、麻布中学に行って召集令状を書いていたことはご存知でしたか？

長： 私は、それはしなかったんですけどね。書きに行った方は何人かありました。

問： それは、長崎さんは当時ご存知だったのですか？

長： はい。私は第1分隊〔※当時「学校報国隊」が組織され、生徒は「分隊」ごとに勤労動員に当たっていた〕とかでしたが、あれは何分隊ですかね。召集令状を書くのが仕事でね。出かけて行きましたね。

問： じゃあ当時ご存知だったんですね。福井にいた時も。

長： まだ福井に行く前に…召集令状を書きに行くという、あれは分隊が分かれていて。

問： 当時、別の分隊のお友達が召集令状を書かれていたってことを知った時はどう思われましたか？

長： やっぱりね、こんなことしていて、この先どうなるのかなという、そういう気はありましたけど、そんなこと口にはね、出せないような雰囲気でした。

問： 同級生の小松英子さんが、長崎さんが編集されたご本『表参道が燃えた日』の中で、こういうふうに言っていますね。「召集令状の宛名を一字一字丁寧に書きました。私の家の近くのご主人のお名前を書いたこともありました。横田治子さんはクラスの高山さんのお父様のお名前を書いたそうで、勿論他言は許されず、心を痛めたものでした。」

長： そうですね。みんな学校の近くに住んでいた方たちですけどね。

問： 召集令状をお友達が書いているというのを聞いた時はどのようなお気持ちだったでしょうか？

長： そういうことが当たり前のような時代でしたからね。

問： 今ならどう思われますか？15歳ぐらいの女の子が召集令状を書くというのは…。

長： 召集令状を書くとか、今から思えばね、本当に、そんな世の中、二度とね、来てはほしくないですね。

問： 長崎さんが女学生だった時は、ちょうど戦争の時期でしたね。入学した翌年からは学校工場で、兵器の一部を作ったり、あるいは、お友達は召集令状を書いたりとかですね、そういうことをしてきたことについて、いわば戦争に向かっていく手助けをしているというか…になりますね。当時はそういうようなお気持ちって持っていらっしゃいましたか？

長： 戦争の手助けをしているとか、そういう感覚ではなかったですね。

山の手大空襲　表参道の惨状

問： 山の手大空襲のお話を聞かせてください。疎開されていた時に山の手大空襲がありましたね。こんな感じだったみたいなんですが（青山周辺の焼け跡写真を提示）

長： 父だけがね、原宿の家へ残っていましてね。

問： お父様はいらっしゃったんですね。長崎さんが疎開から戻られた時はこんな感じだったんじゃないかと思うのですが、このような状態をご覧になられた時、どう思われましたか？

長： 帰ってこられたことが嬉しくてね。まあ、こんなになっちゃったのかと思いましたけど、なんか帰ってこられたということが、まあ嬉しかった。そっちの方が強くてね。

問： 焼け野原の中で、東洋永和だけは焼け残ったそうですね。（学校周辺の焼け野原の写真を示しつつ）ここが多分、校舎の塔がありますよね。ここが鳥居坂ですね。だから、麻布一帯がこうやって焼けてし

まったところにお戻りになって…。そして、お家のあった表参道も燃えてしまったんですよね。

長：ええ、うちは原宿駅の竹下口、竹下通りの坂をちょっと横に入ったところで。もうそこは何年でしょうね。結構長いこと住んでいたわけですよ。

問：今のお住まいに移られる前まで、原宿にお住まいだったのですよね。それで、長崎さんはこのご本を編集されたのですね。たくさんの同窓生のお話も集めてくださって、それを編集された時に、史料室にこれだけ英和の同窓生が載っていますよとお知らせくださいました。そのお手紙も史料室に残っています。たくさんの英和のご友人が空襲に遭って、そのお話を集めて編集されたのですよね。

ご自分は体験されなかったけれども、表参道の空襲をこうやってご本におまとめになったのは、どのようなお気持ちからでしょうか？

長：やっぱり、これは残しておかなきゃいけない事実だと思いました。表紙の絵、これは木村万紀さんという青南小学校の同級生が描いたんです。

問：青南小学校の同窓生も英和の同窓生もたくさんの方が、この表参道の空襲で被害に遭われたわけですよね。だから長崎さんにとっては身近な方たちが酷い体験をしてしまった歴史だから、しっかりと残さなければというふうにお考えになったのでしょうね。これをお作りになる時っていうのは大変だったでしょうね。

長：残しておかなくちゃという気持ちの方が強かったのでね、苦労だとか、そういうことはね、あんまり感じなかったですね。

問：なぜ残しておかなければいけないと思われたのでしょうか？

長：やっぱりね、あんな体験をね、この後の人たちにさせたくはないという気持ちが大きかった。表参道の石灯籠〔※参道入口みずほ銀行前に現存〕もね…。〔焼夷弾で削られた〕傷が残っていて。爆撃の跡の。

次世代へのメッセージ

問：長崎さん、最後に教えてください。戦争を体験した長崎さんとして、若い世代の人たちに、何か伝えたいことがあるとしたら、どのようなことを伝えたいですか？

長：…難しいわね。本当にまあ、現代の若い人にね、伝えたいと思ってもなかなか伝わらないようなね、時代になってきちゃったのかなと思いますね。

問：でも、戦争を経験されているが故に、伝えておきたいと思うことはないですか？

長：やっぱりもう、戦争はどのような理由があってもしてはいけないものでね。今のね、表参道なんか賑やかになっちゃっているとね、これでいいのかなと思いながらね。まあ私どもは歩くのですけども。

問：これでいいのかなっていうのは？昔を忘れてしまっている人たちが多いということでしょうか？

長：ええ、そうですね。表参道というと、もう華やかなね、いろんなブランド商品なんかが並んだね、そういう街並みを思い浮かべる方が、ほとんどなのだと思いますけどね。どうやったら伝えていけるでしょうかね。それこそ皆さん方のお力添えをいただかなくちゃならないと思いますね。

Uさん

※ご本人のご意向によりお名前は伏せております。

昭和18年、東洋永和女学校に入学。昭和20年５月の山の手大空襲で家が焼失しなかったことなどもあり、疎開せず、終戦まで継続して東洋永和で学校生活を送る。勤労動員時に召集令状を書いた。

（取材：2026年５月29日）



音楽室での勤労動員作業

問：昭和19年の12月16日から勤労動員が始まって…（Uさんの名前もある「学校工場作業日誌」のコピーを提示）勤労動員は、どのような作業をされていらっしゃったのですか？

Uさん（以下「U」）：私は、沖電気のコイル巻きです。沖電気から２名の工員さんが指導に見えていた。小高君と大坪君。親しみをこめて「君」とお呼びしていました。その方たちもね、18歳くらいの若い、明るい、いい工員さんでしたよ。それからしばらく

したら、もう見えなくて。今思うと、あの方たち、あれから召集令状でも来たんじゃないかしら…。

問：作業をしていた時はどのようなお気持ちで？

U：そうしなさいって言われるので。それならやらなきゃいけないっていうことで。おしゃべりすればコイル巻きの数を忘れちゃいますからね。一応はそれなりにやりました。でもね、ちょうど場所が音楽室だったんですよ、ピアノがあって。いつも非常食を持っていましたから、お昼休みなんかは、お弁当をいただいた後にピアノの陰に隠れて非常食をポリポリ食べちゃったし。そんなこともありました。

問：普段、音楽室は合唱したり、楽器を弾いたりする場所ですが、そこがそういう工場になっていることについては、どのように思いましたか？

U：違和感なくて。あ、ここがこういうことをさせられる場所になっちゃったのだな、こういうことしなきゃいけないのだなっていうふうに何も抵抗なく、しなさいっていうことをしていましたね。だから誰もこんなこといやね、とか言う方はいらした記憶はないです。

やらなきゃいけないっていうことのほうが強かったかもしれませんね。私は幸せなことに学校に通って働いていたのですけど、一部の上級生は他の現場の工場に行かされていてね。そこは、私は幸せだったと思いますね。学校でできたっていうことがね。

そしていつかしら、工員さんが見えなくなってからですけれど、資材が来なくなって、私は沖電気に資材を取りに行った覚えがあるのですね。そのうちその資材もなくなっちゃって。だからそういう合間にちょっと授業をしたかなと思いますけどね。

問：勤労動員の中で、休憩中に讃美歌を歌われていたりした？

U：どこの軍か分かりませんが、英和の校舎の何階かをお貸ししたんですよ。そこの一番トップの方が理解のある方でね、音楽の小林〔悦子〕先生が「ちょっと生徒たちに讃美歌を歌わせてもよいでしょうか」ってうかがって。そうしたらその方に理解があって、「あまりね、大っぴらにはダメだけど、希望者だけが集まって歌うことは構いません」とおっしゃって。

山の手大空襲

問：昭和20年3月10日の東京大空襲後、5月23、24、25日のいわゆる山の手大空襲と言われる空襲の時はどうされていましたか？

U：焼夷弾で。あの焼夷弾ってね、束になって落とすのですね。うちも焼夷弾の飛び火が屋根に落ちたのですが、水をかけて、ちょっとで止まったので大丈夫でしたけどね。

問：その時は、どのようなお気持ちでしたか？

U：慣れるっていうのが恐ろしいと思うのですけど。3月10日が、ありましたでしょ。大変な恐ろしい。また今度はこちらに〔空襲が〕来て。一生懸命水をかけなきゃいけないっていう思いで。怖いとか思っていませんでした、全然。

問：学校周辺の焼け跡を見た時はどのようにお感じになりましたか？

U：戦争って、こういうことかなって。だからもう焼けている現実を見てますから、何も思わないで、〔焼け野原になった〕麻布十番を通って学校に来ました。英和にもちょっと落ちたんです、焼夷弾。でも先生がたが消されたのね。でも向かい側は焼けてしまって。鳥居坂教会がね、学校の校庭の片隅にありました。あそこは焼けちゃったわね。可愛い教会でした。

問：学校が残っているのをご覧になった時はどのようなお気持ちでしたか？

U：やっぱり嬉しかったのじゃないかしら。英和大好き人間ですから。よかったと思ったと思うんですよ。麻布十番の方からね、鳥居坂を上がって英和が見えたら、やっぱり嬉しかったのじゃないかと思いますね。

問：空襲直後ということではないと思いますが、クラスメイトの沢池（さわいけ）さんが山の手大空襲で亡くなられたことを、お知りになった時はどういうふうにお感じになりました？

U：「ええっ」って思いました。私と通学路が同じで時折ご一緒に帰っておりましたので。その日の晩に限って、青山の方のお祖母様の家に泊まられた。お家に帰られれば、大丈夫だったかもしれません。それもね、いろいろです…。怖いですね。恐ろしいわ…。本当に。

昭和20年５月25日　学校工場作業日誌最後の記述

問：学校工場作業日誌の最後の記述がこちらにありまして。5月25日、つまり、山の手大空襲の日です。

U：そうです。この25日の空襲の翌日、休んだ覚えがあります

問：学校にたどり着いて来た生徒さんもいると。たどり着いた生徒さんが書かれている中で、だんだん

被害の状況がわかってきているという内容が書かれていて、消息不明の方もまだいると。そこに「私たちみんなもいつかはそうなるのであろう」っていうふうに書いていらっしゃるんです。同級生が。この書かれてる生徒さん、クラスメイトのお気持ちっていうのはお分かりになりますか？

U：また空襲があって、いつ私たちもこういうふうに空襲で家が焼けてしまうかもしれないなってことを思われたんだと。この方、きっとね、私と違って、青山とかひどかったんですよ。そちらにいらした方が実感として書かれたのだと思うのね。悲惨な思いだったのじゃないかしら、と思いますね。

まだね、あまりよく世間のことがわからない年代の私たちでしたけどね、なんて恐ろしいことが起こっているんだろうっていうことであったと思います。お家が目の前で焼けるんですから。焼けるだけじゃなくて、避難する方のいろいろな叫び声とか、そういうのもあると思うのです。

問：山の手大空襲の後、学校の中はどのような感じでしたか？

U：欠席の方も多いですし、それから疎開していく方も。まあ、もっと前からどんどん生徒は減ってきました。その空襲の後は結構お休みしたと思います。コイル巻きもしなくなっていました。

召集令状（赤紙）書き

問：今まで勤労動員、山の手大空襲の話をお聞きしました。その後、沖電気工場も焼失して資材がなくなってきて、学校工場も、もう機能しなくなっているところまでお聞きしました。その後の麻布中学でされていた作業について教えていただきたいです。

U：麻布中学でね、召集令状を書く作業ですけれども。召集令状以外にも何か書いていたかと…それに添付する何か、きっと何月何日どこの聯隊に来てほしいって書いてあると思うのですが、その時に持参するものとか、そういうのもね、書かされていたような気もしなくもないですね。召集令状ばかりじゃなくてね。

私、麻布中学にどう通ったか覚えていないのです。永和に来て、担任の比屋根さかえ先生に引率されて暗闇坂を登って行ったのじゃないかと。召集令状を書かされました。で、その時にね、２教室ぐらいを使ってさせられて、それもどこの軍隊の兵隊さんかわかりませんけど。兵隊さんがいろいろと書きなさいっておっしゃってくださったと思うのですけどね。あまり高官の方がいらした記憶はない。

もうその頃は電車もね、学校まで通うのが大変なので欠席の方が多かったと思います。だからいつも集まるのは十何人ぐらいじゃなかったかしらね。

でもそんなにね、長時間、一日、朝から夕方まで〔作業した〕というような記憶はないのですね。

問：召集令状のどの部分、どういうことを書いていたのですか？

U：やっぱり住所と名前でしょうか。何月何日に聯隊に来るように、ってことでしょうね。

問：召集令状を書かれている時は？当時はどのようなお気持ちで？

U：やらされているのですから。ただ間違いなく、書くしかないと思ったのでしょう。間違えれば怒られますからね。きっとそうだと思いますよ。もう、そういう時には自分がこう思っている、ああ思っているということはなくて、しなきゃいけない、間違えたらいけない、兵隊さんに怒られるわ、と。そういう感じじゃなかったかしらと思いますね。

問：これはUさんだけではなくて、同級生、みなさん共通していると思うのですけれども、本来学校で勉強する世代や年齢じゃないですか。それなのに、戦争ということがあることによって、学校工場でコイル巻きをしたり、でもそのコイル巻きというのは武器に使われていったりするわけですよね。本来勉強できる方たちのはずなのに、武器を作らされ、そして挙句の果てには召集令状。書けって言われるから書かされて…。でもその召集令状をもらった人は戦地に行って…命をかけて…。

U：私ね、今から思うと、あの時期に書いた召集令状、その方たちに届いて、本当に出征なさったかどうか…もうその年の８月15日が終戦でしたから。今思うと、あれはもう無駄であってほしかったと思っていますね、今はね。その時は思いませんでしたよ。その時はそんなことを考えません。今ね、あの書いた召集令状がすぐに焼却されていたら、その方たちのところに届かないであってほしかったって、今思いますね。だってもう、その方たちっていうのは、要するに、初めに戦争にいらした方たちと違って、丙種というか、体がどこかご不自由な方とか、そういう方たちだったと思うので。そういう人たちを召集させたんですよ、もう日本は。

でも、そんなことはその時私は考えませんでした。私たちは言われたことをするばかり。間違えてはいけないとかね。そういう考え。ですからあの時の召

集令状は無効っていうか、もう使われなかったらよかったなって今思っています。
問：使われなかったらよかったなって思うのはどうしてでしょう？
U：戦争は…なんで一般国民が戦場に行ってね。恐ろしい。今も思い出します。実際にあの沖電気の工員さんたち、若い青年たちが戦争にいらしたんだと思うと、なんて大変な恐ろしいことかと思いますよね。絶対に、みなさんおっしゃいますよ、戦争なんてとんでもない、もう絶対してはいけない。だから平和がいかに大事か、それは思いますね。
問：今、Uさんのお話を聞いて、その通りだなってすごく思っております。当時は知らぬ間に、ある種、戦争に協力してしまっている。それは意思ではなくて、形として協力してしまっている。今はそれについてはどういうふうに思われますでしょうか？
U：あの時はもう従わなければいけなかったですね。だから何の疑いもないというか。まあもっと年配の方は疑いをもった方もいらっしゃったかもしれませんけど、まだそこまで考えられなかった。私はね。お友達はわかりませんよ。思慮深い方もいらしたから、なんでしょうと思いながらなさったかもしれない。私はもう言われるままにしていましたね。
だんだん、洗脳までいかなくても。だんだん、時代がそうなってきますしね。学校だけじゃなく、日常生活がだんだん、そうなって。そうなっていっちゃうんですね。だから、恐ろしいんですよ、そういうことって。
問：国民全員で、総力戦で戦っていたというあの時代を、今はどういうふうに思われるのでしょうか？
U：いや、恐ろしい時代でしたね。陸軍や海軍の上層部の方たちのこと、私たちでは全然わかりませんから。でも、日本がやっぱりどんどん進出していきたかったのでしょうね。満州とか中国とかね。いろいろな国が今でもそうですよね。なんで、もっとね、穏やかに暮らすというか、そういうことにならないのかと思います。
問：Uさんが戦争の時期に、失ったものがもしあれば、どういうものだったでしょうか？
U：要するに、勉強できなかった。失ったものね…やっぱり私は「知識」ですね。勉強できなかったこと。それから好きなこと、ピアノの勉強も練習も、もうやめましたしね。まあ、それもしたかった。できたらよかったかなと思ったりね。そんなことですかしらね。

上野峻一先生との対話

（中高部聖書科 上野峻一教諭がインタビュー参加）
上野：はじめまして。聖書科の教師をしている上野と申します。日誌を使って、生徒たちが英和の歴史を学びながら、聖書も学ぶっていう授業を今やっていて…。Uさんが学校にちょうどいらっしゃった時って、キリスト教の雰囲気、永和におけるキリスト教の空気は、どういう感じだったのですか？
U：吉本てう先生の聖書の時間はありましたけど。でもそれはもう勤労動員の少し前からなくなりましたね。要するに英和の「英」は「永」に変わりましたし。それにミッションスクールでは礼拝もさせていただけなくなりましたからね。軍隊の目も…軍隊が学校内に入りましたからね。ですからね、そういう空気はなくなりました。終戦後ですよ、また牧師様が見えてお話しくださるのは。
上野：当時のキリスト教のなかった永和の様子は…。
U：「なかった」というより「潜めていた」…。さっきお話ししたように、 勤労動員中でも讃美歌をちょっと歌っていたの。讃美歌を歌いたいっていう私たちの気持ちを察してくださったのですよね。礼拝もないしで、ちょっとは歌っていました。でも礼拝とかはしなかった…。
上野：今、生徒たちに、僕がこの日誌を使って話をする中で、やっぱり「平和」っていうことを、生徒たちに考えてほしいんですよね。動員とかそういうことを経験したUさんだからこそ、その後にご自分でもいいし、周りの方もそうなのですけど、「平和をつくる」っていうふうに言った時に、何が大事と思われますか？
U：平和をつくる…。「思いやり」かしらね、やっぱり。平和をつくるのに何が大事かしらね…。「思いやり」。今ちょっと思いつくのは、その言葉かしら。
上野：今日は、Uさんとお話ししたくて来ました。日誌を生徒たちが読む時に、今Uさんがどうやってこの時代を生きているのかっていうのを、僕自身が一緒にお話ができることで、Uさんの感じっていうか、想いっていうか、この日誌を書いた80年前の英和生が、80年経ってUさんみたいな方になるんだっていうのがわかるのが、多分、僕が来たかった理由です。ありがとうございました。

次世代へのメッセージ

問：私たちが経験してない戦争の体験を踏まえて、Uさんが大事にして生きてきたこと、核として大事

にして生きてきたことはどういうことだったでしょうか？

U：若い頃、いろいろありましたね。だんだん食料事情も良くなってきましたし、いろいろ変わってきましたけど。やっぱりね、一日一日を大事に生きるっていう形の生き方ですね。戦争は、とても恐ろしいことですしね。恐ろしいっていう言葉では足りないくらいですからね。やっぱり、一日一日を楽しく生きる。楽しく生きてきましたが、いろいろありました。何とか、ここまで来ましたけれど、それはみなさまのおかげなんですね。本当。ありがとうございます。

ものを大事に、とは思います。ご馳走様、ありがとうって言って、必ず。それから、衣類もね、もうボロボロになっても、昔はね、つくろいものとかもしましたね。

問：今、ご自身のご経験を踏まえて、我々世代、あるいはそのさらに下の世代に伝えておきたいなと思うことはどのようなことでしょうか？

U：それはね、いっぱいありますけど、今、みなさんそれぞれでいいじゃないですか。でもね、人に迷惑をかけないこと。それから、もっと叱られても我慢すること。我慢って言っちゃいけないけど、叱られるっていうのは、叱られる理由があるのですよね。ただ、叱る方っていらっしゃらないと思うのだけど。一つ置いて考えて、それでも理不尽だったら、それはいいのですけど。でもちょっと世の中、乱れていることが多いかなと思ったり。ものを大事にすることで自分も大事にする。まず自分自身を大事にして、そして人様のことを考えてあげることだと思います。

謝　辞

今号の「史料室だより」制作にあたり、井上二葉様、長崎美代子様、U様には大変お世話になりました。お支えいただいたご家族様へとともに、心より感謝申し上げます。インタビューの際にはNHKの取材クルーの皆様にもたくさんのお力添えをいただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

また、特集制作に先行して、東洋英和女学院同窓会湘南支部の皆様、中村カヨ子様、秋葉明子様にも戦時中の貴重な体験をお話しいただきました。ご仲介の労をとってくださった多くの同窓生の皆様へとともに、心より感謝申し上げます。

東洋英和女学院　広報史料室

NHK 番組　放送記録

● 本放送（地上波）

番組名　NHKスペシャル
『少女たちの戦争　時を超える学級日誌』

放送局　NHK 総合

日　時　2026年8月15日(土) 22：00～22：49 (49分)

● 本放送（衛星波）

番組名　BS特集（NHKスペシャルの拡大版）
『少女たちの“戦争と平和”
読み継がれる学級日誌』

放送局　NHK BS

日　時　2026年8月29日(土) 23：10 ～ 24：09 (59分)

――― お見逃しの方や、再度ご覧になりたい方は、NHKオンデマンドでご視聴いただけます。 ―――

●NHKスペシャル（49分版）期間：2027年８月18日まで
●BS特集（59分版）　　期間：2027年９月 ２日まで

※今号の「史料室だより」No.107は特集ページ拡大のため、「資料紹介」「東洋英和の先生がた」は休載いたしました。

展示コーナーご案内

◆学院資料展示コーナー企画展
中高部図書室＆学院広報史料室　コラボ展示
「今考えたい　戦争とは　平和とは」



今回の展示では、ＮＨＫスペシャルでも紹介された中高部図書室での展示を拡大させ、中高部司書教諭の植田亜里沙先生企画のもと、「学級（クラス）日誌」を展示します。　　会期：2027年８月28日（土）まで

◆村岡花子文庫展示コーナー企画展
大学 国際関係研究所シンポジウム関連展示
「婦人参政80周年と村岡花子」



2026年は婦人参政80周年にあたります。村岡花子の交流関係や蔵書から、花子が考えた女性の権利、社会参画の在り方をたどります。

会期：2026年11月28日（土）（シンポジウムに合わせて一部展示）
2026年12月２日（水）～ 2027年５月22日（土）まで

入場料：無料 どなたでもご自由にご覧いただけます／展示場所：東洋英和女学院 六本木校地本部・大学院棟１階 ／
公開時間：日曜日・祝日・長期休暇以外の９：00～20：00（土曜日は９：00～19：00）
※館内の洗面室はご使用いただけません。※団体でのご見学の場合は、予めお知らせください。


かえでくん

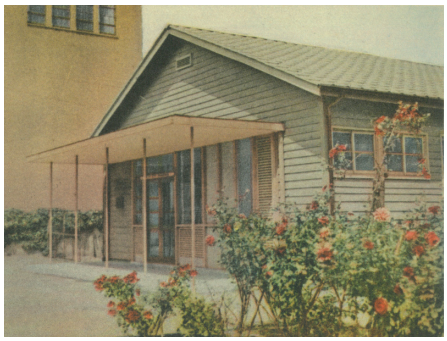
史料室から、ごきげんよう

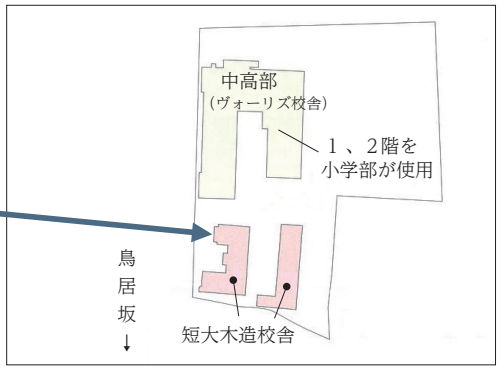
短大木造校舎で過ごした小学生 ―小学生と学生が同居!?―

戦後の東洋英和では、学制改革（6・3・3制の導入）や、学校の人気の高まりにより生徒数が増加したため、教室不足が深刻化していました。1954年に現在の小学部の校地に小学部新校舎が完成する前、それまで中高部生と同じ校舎で学んでいた小学生たちは、ついに教室が足りなくなる事態を迎えます。

そこで1953年度の小学６年生は、ヴォーリズ設計の旧校舎の隣に設置されたばかりの短期大学木造校舎を教室として使うことになりました。そこでは翌年の設置を控えた短大英文科に先駆けて、高等部英文専攻科生のお姉様たちが学んでいたのでした。小学生と年上の学生との奇妙な「同居生活」が始まりました。

卒業生（1954年小学部・1960年高等部卒）の証言によると、江良顕三郎先生（後の小学部長）が大変気の毒がって「あなたたちには苦労をかけるね…妹たちのために我慢しておくれ」とおっしゃったそうです。６年生は木造校舎の端の教室で学んでいましたが、専攻科とは違う時間割なので、休み時間に遊んで騒いでいると松尾芳子先生（後の短大英文科長）に怒られました。後年、その児童の１人が長じて短大の英文科で松尾先生に学び、小学部時代に叱っていたことを松尾先生もよく覚えていらしたそうです。短大の保育科が１階の体育館で音楽の授業をすることもあり、小学生は気になってみんなそちらを見てしまう…など、珍しい１年間を過ごしました。年史類には書かれていない、英和の歴史の一ページです。


1953年から使用していた木造校舎（正面）
（竣工は1954年とされている）



当時の六本木校地配置図

利用統計（2026年４月～2026年９月）

		４月	５月	６月	７月	８月	９月
展示見学者数		95	132	106	148	110	169
展示見学者区分	学内関係者	28	15	54	31	16	46
	一般	67	117	52	117	94	123
		４月	５月	６月	７月	８月	９月
資料閲覧者数（累計）		10	12	10	7	3	8
閲覧者区分	本学学生・生徒			2	5		
	現教職員	4		7	1	2	1
	旧教職員						
	同窓生・学院関係者	3	2	1	1	1	4
	同窓生（研究者）		1				
	学外研究者・学生	1	4				3
	一般	2	5				
利用の目的	年史編集						
	著述・論文作成	2		2			2
	伝記資料調査	1	1	1	3	1	4
	記録類の調査・研究	7	11	7	4	2	
	学院広報関係						
	その他						2
資料の種類（重複あり）	東洋英和関係	9	12	6	7	1	6
	カナダの教会関係			3			
	村岡花子関係			4		2	2
	周辺地域史		4				
	その他	1					
		４月	５月	６月	７月	８月	９月
月別レファレンス件数		10	15	12	10	4	12
質問者の区分	本学学生・生徒						
	現教職員	4	6	8	3	1	4
	旧教職員			1			
	同窓生・学院関係者	2	3	1	1	1	4
	同窓生（研究者）						
	学外研究者・学生		2		4	1	4
	学外研究機関					1	
	一般	4	4	2	2		
質問内容（重複あり）	資料所蔵調査	3	6	3	5	2	3
	写真所蔵調査			2	1		1
	事項調査	5	8	3	4	2	3
	その他	2	1	4	1		5

史料室の活動より（2026年４月～2026年９月）

（☆は複数回）

2026年４月
・１日―「東洋英和楓の会室」を廃して「広報史料室」を設置し、「史料室」を統合
☆編集／校正―「史料室だより」No.106
・展示コーナーにて新任者に学院沿革説明（松本）
☆学院ホームページリニューアル関連業務（おもに歴史関連ページを担当）
☆打ち合わせ―「楓園」編集について
☆年表マスターデータ整備（酒井）
☆照会／資料提供／卒業生インタビュー関連業務／撮影アテンドなど―NHKスペシャル番組制作関連
☆資料整理―寄贈資料、行事資料、逐次刊行物ほか
☆来室／調査―NHKスタッフ。戦時下の史料、クラス日誌、画像データベースなど
・来室―フレンズの会　渡辺紀子氏・三善三千子氏（元短期大学職員）（両名とも1959年高等部卒、1961年短大英文科卒）。1965年長野彌院長のNY同窓会支部訪問時の写真やエピソードなどを教えていただく
・出張―大学礼拝奨励のため（三笠）
・20日、23日―大学フレッシュマンセミナー「自校史」授業
☆校正―「楓園」102号
☆照会―同窓生より、故佐々木孝男中高部体育科教諭追悼録作成のため→東洋英和新聞などの記事を紹介
☆来室／調査―上野峻一中高部聖書科教諭と卒業生。クラス日誌、ミス・ハミルトン関連資料ほか
☆照会―上野峻一中高部聖書科教諭より、戦中の卒業式、校友会についてなど
・来室／調査―酒井順子氏（エッセイスト）、文藝春秋社加藤はるか氏。「女子校文学」連載にあたり聞き取り調査、資料閲覧

2026年５月
・来室／調査―町田市立自由民権資料館松崎稔氏。最初期在校生の石阪登志について→各年史での掲載を紹介
・桜プロジェクトのトピックHP掲載準備
・インタビュー―秋葉明子元中高部理科教諭（楠山・松本・NHKスタッフ）
☆打ち合わせ―「楓の会」イベント・公開講座などについて
☆照会―他大学教員より、戦前に保育科に在籍していたタイの留学生について
・10日―「史料室だより」No.106納品、発送
・15日―第５回　150年史研究会（研究倫理、生成ＡＩの利用などについて確認）
・20日―井上二葉氏インタビュー撮影（楠山・松本・NHKスタッフ）
・校正―カナダ合同教会Won Hur牧師の東洋英和と卒業生、桜プロジェクトについてのブログ等に掲載する記事
・照会―中高部の正門（現在）の呼び方の変遷について→「正門」の名称は、旧中学部校舎完成の1962年から
・照会―学院同窓会会長より、「東光会」という会名の由来→『東光　東洋英和女学院創立百周年記念』（書籍）の110頁を紹介。命名の日時と由来は実のところ不明
・25日―長崎美代子氏インタビュー撮影（松本・NHKスタッフ）
☆来室／調査―町島由美子中高部国語科教諭ほか。生徒会関連資料調査（「東洋英和新聞」「楓」など）
・NHK撮影対応―広報史料室と書庫、中高部地下倉庫
・来室／調査―岡野道子芝浦工業大学准教授（1997年高等部卒）、小柏典華同准教授、研究室学生２名。東洋英和幼稚園園舎改修資料ほか
・29日―U氏インタビュー（楠山・松本・NHKスタッフ・石澤中高部長・上野峻一聖書科教諭）。インタビュー後、校内を歩き、旧校舎の部屋の位置などを確認

2026年６月
・１日―公開開始のリニューアルされた学院ホームページの修正確認
・１日、２日―出版文化社の新人研修に広報史料室を提供
・２日、９日―大学輪講「東洋英和の歴史」授業（松本）
☆照会／来室／調査―本学教員。婦人参政80年にちなみ、村岡花子関連資料など

☆来室／調査―本学大学院生。ミス・ブラックモアと保育について
☆NHK撮影対応―旧ヴォーリズ校舎の理科実験室の場所を現在の校舎に探す撮影。史料室関連インタビューに回答
・打ち合わせ―上野峻一中高部聖書科教諭、植田亜里沙司書教諭と「クラス日誌」の中高図書室での展示について
☆NHK史料撮影対応―史料貸し出し、都度の写真の照会など
・調査―修養会の変遷について。スクラップブック、「学内ニュース」などを確認（酒井）
☆資料整理―「筑豊の子供を守る会」関連資料／戦時下関連資料のまとめ
・19日―第1回　史料室委員会
・20日―大学「東洋英和の歴史」授業見学回対応
・23日―中高部文芸部（13名）来室。書庫案内、村岡花子資料、片山廣子へ献本された芥川龍之介『羅生門』などを閲覧
・資料貸出―中高部図書室へ、展示のためクラス日誌
・出張―大学史資料協議会総会（三笠）

2026年7月
・来室／調査―元保護者。トミソング関連
・小学部より『小学部校地校舎記録集』受領
・照会―同窓生。故田中晶子中高部社会科教諭のご葬儀でご子息に渡すため→「東洋英和新聞」記事など紹介
・旧ヴォーリズ校舎の模型を展示コーナーに移動
・展示案内／ラジオ番組収録アテンド―三ツ矢直生氏（歌手）、村岡恵理氏。「赤毛のアン」資料を紹介
・10日―第6回　150年史研究会
・戦中・戦後の学制改革期の生徒学年一覧作成（酒井）
・来室／調査―上野峻一中高部聖書科教諭と在校生。曾祖母が1945年の非公式の卒業アルバムに写っているか調査
・19日―旧ハミルトン＆ハード軽井沢コテージ清掃奉仕（約30名の同窓生が参加。楠山・松本・三笠・酒井）
・インタビュー―岡田苑子氏（1966年高等部卒）お父様は「少女の友」編集長だった神山裕一氏。村岡花子とも親交あり／戦中の雑誌検閲の話など
・資料探索―中高部地下倉庫（楠山・松本）。クラス日誌蔵書数のカウント、戦中史料のピックアップなど
・照会―院長より、戦中戦後のクリスマスについて
・打ち合わせ―幼稚園長・教諭→150年史に向けた準備
・来室／調査―中高部生徒2名。画像データベースや卒業アルバムを見て、眉毛や髪形などについて調査

2026年8月
・資料調査―小学部倉庫。小学部教頭と教諭と一緒に保存すべき資料の検討など（楠山・松本・三笠）
・来室／懇談―相模女子大学アーカイブ室スタッフ。年史編纂や史料室運営について意見交換、展示コーナーや書庫もご見学いただく
・来校―山野内勘二元カナダ駐在大使が院長にご挨拶。今後の日加修好100周年イベントへの英和参加の打診など（松本陪席）
・打ち合わせ―植田中高部司書教諭と学院資料展示について
☆執筆／編集／校正―「史料室だより」No.107
・取材―「楓園」103号。NHKスペシャル猪俣修一ディレクターを迎えて座談会（上野聖書科教諭・楠山・松本）
・照会―遺愛学院より、遺愛学院でも召集令状を書いていた→参考資料を共有いただく

2026年9月
・3日―学院資料展示設営（中高図書室とのコラボ企画）
・4日―第2回　史料室委員会
・資料貸出―徳島県立文書道館へ林芙美子詩稿（レプリカ）
・11日―第7回　150年史研究会
・展示案内―キ同盟全国聖書科部会（約50名）
・執筆―「楓園」史料室レター、特集記事など
・来室／調査―東京YMCA戸坂昇子氏（卒業生）。史料室業務について情報交換

【おもな移管資料】
・GHT倉庫より、旧同窓会館写真、旧幼稚園園舎図面など
・中高部より、演劇部資料一式（台本や写真アルバム）
・中高部地下倉庫より、戦時期の時間割など

【おもな受贈資料】
・栃内禮子先生ご葬儀資料（カセットテープ）／外﨑長三郎先生お祝い会集合写真／故井上健之助先生葬儀順序／故塩原千代同窓会会長葬儀順序／水木百代先生関連資料（出演ラジオの録音テープ・新聞記事・添え状・年賀ハガキ）／旧大講堂の天井パネル1枚（ブルー）ほか多数
・お祖母様がカートメル女塾に通っていた際の教科書（和本）／写真2点／肖像写真2枚（宣教師のミス・ケギーやミス・ライアンを確認）
・お母様遺品の戦中の寄せ書き帳3冊／写真（制服姿）／昭和16年卒業アルバム／スクラップブックほか
・井上二葉氏（会友）より、井上二葉演奏記録「フランスのピアノ曲　近代の華やぎⅠ」CD（2026年6月25日発表）
・父親有志の会より①第28回東洋英和女学院ハンドベルフェスティバルBlu-ray／②39th Christmas Concert Blu-ray
・秋葉明子元中高部理科教諭より、ヴォーリズ校舎のリノリウム・タイル、野尻の写真（1991年8月）ほか

（書籍・雑誌・論文）
・青木豊氏（渡邊里雨氏ご子孫）より、「はなかたみ」（復刻版）、『「少女の友」創刊100周年記念号　明治・大正・昭和ベストセレクション』実業之日本社、2009年ほか
・水谷悟静岡文化芸術大学教授（『140年史』監修者）より、中野目 徹編『文明化とナショナリズム　日本近代思想史の枠組を問う』吉川弘文館、2026年（水谷教授は第4章「雑誌『婦人新報』にみる「文明」と「愛国」―日露戦争期における日本基督教婦人矯風会―」を執筆）
・酒井順子氏「女子校文学」所収『オール讀物』3・4月号、5・6月号、7・8月号（取材協力）
・増山かおり氏『死ぬまでに一度は訪ねたい東京の文学館』（増補改訂版）エクスナレッジ、2026年（取材協力）
・佐藤浩代大学教員より、佐藤浩代「1949・50年におけるキリスト教主義幼稚園教員養成教育の実際―東洋英和幼稚園教員による『保育要領』および「リズム」の記録の検討を中心に―」『上智大学教育学論集』第60号抜刷、2026年3月（資料提供）
・菅原陽子元東洋英和幼稚園教諭より、関東学院大学キリスト教と文化研究所所報「キリスト教と文化」第23号、第24号（各号に研究論文を執筆）
・岩井真智子氏（1988年高等部卒）より、自著『理想の人生を叶える「素肌美人」のつくり方』2025年8月、WAVE出版
・長崎美代子氏（卒業生）より、編集ご担当の『表参道が燃えた日―山の手大空襲の体験記―〔増補版〕』重版
・外﨑弘子氏（卒業生）より、「百万人の福音」いのちのことば社、2014年9月号（特集：村岡花子）

【おもな画像提供】
・中高部聖書科授業のため戦中の画像多数
・NHKスペシャルのため戦中の画像多数
・大分県へ、PEIイベントのため村岡花子関連画像2点
・山梨英和宣教師館へ、展示のため宣教師画像4組1点
・町田市立自由民権資料館へ、展示のため初期卒業生石阪登志関連で初期の女学校画像3点

資料ご寄贈のお願い

広報史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただけますと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合せ先】
東洋英和女学院広報史料室
〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40
Tel 03-3583-3166（直通）
Fax 03-3583-3329
E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp

2026年度 史料室委員会委員

委員長	楠山　眞里子（広報史料室長）
大学	平体　由美
	野田　潤
中高部	大崎　光恵
	髙橋　美抄子
小学部	地主　武史
幼稚園	井上　直子
かえで幼稚園	片岡　朝子
広報史料室	松本　郁子
	三笠　知世

小学部『校地校舎記録集』の頒布方法について

小学部では、校舎の移転に先駆け、現校地校舎で学んだ同窓生の思い出を写真と共に記録した『校地校舎記録集1954年～2026年』を刊行しました。「史料室だより」No.106に「部数限定、販売予定」という記載がありましたが、販売はいたしません。
ご希望の同窓生には、お一人一冊差し上げますので、ご本人がご来校ください（代理の方や郵送でのお渡しはできかねます）。同窓会がある場合はご連絡ください。
※お受け取り：平日9時～16時
　小学部事務室にて